

ESD佐保川流域プロジェクト（4）

－平城山ランドスケープ創出の取り組み－

竹村景生

（奈良教育大学附属中学校）

中澤静男

（奈良教育大学 教育連携講座）

吉川俊美

（奈良教育大学 次世代教員養成センター（ESD・課題探究教育部門）研究員）

河本大地

（奈良教育大学 社会科教育講座（地理学））

谷口義昭

（奈良教育大学 技術教育講座（技術教育））

山本浩大・若森達哉

（奈良教育大学附属中学校）

ESD Saho River basin project (4)

The match which creates Narayama landscape

Kageki TAKEMURA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

Toshimi YOSHIKAWA

(Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Yoshiaki TANIGUCHI

(Wood Working Laboratory, Development of Technoligical Education Nara University of Education)

Koudai YAMAMOTO, Tasty WAKAMORI

(Junior High school attached to Nara University of Education)

要旨：本稿では創造的なランドスケープ再生に向けて、里山としての平城山（ならやま）の「空間の履歴」を読み解き、「地元学」に学びつつ、新たな佐保・佐紀路の景観の創出に向けて、学生・地域住民・NPOが協働した取り組みを振り返る。また、高齢化していく地域社会の持続可能性に留意しつつ、台風などの「防災」対策や、里山への理解を深める「新『古道』」づくりに取り組むなど、ESDの具体化を企図している。裏山クラブの課外活動が、ランドスケープ学習として「奈良めぐり」など「総合的な学習の時間」への連続性を貫けたのは、ESDが奈良教育大学附属中学校の教育課程の背景にあるところが大きい。本プロジェクトでは、将来的に地域に根を下ろして貢献できるインタープリターを育てるキャリア教育も視野に入れた学習と実習の場としてもデザインすることを試みた。

キーワード：ESD

総合的な学習の時間 Period of Integrated Study

特別活動 Special activity 課外活動 Extra curricular activity

キャリア教育 Career training ランドスケープ landscape

1. はじめに

ESDは持続可能性の理念を学び、学び取られた価値観

を自らの教育実践に具現化するとともに、地域社会に普及するところにその教育としての意義があると考えられる。本プロジェクトは、佐保川流域圏（春日山原始林の源流域も含め、大和川合流地点まで）にある附属中学校区（平城



【図1 1945年 第2次世界大戦直後の平城山丘陵 奈良教育大学附属中学校上空 茶畑・耕作地が広がる 米軍撮影】
国土地理院ウェブサイトの空中写真に加筆。



【図2 1960年 高度成長期へ 奈良ドリームランドの工事着工と奈良教育大学附属中学校建設 宅地化へ】
国土地理院ウェブサイトの空中写真に加筆。

山地域)をフィールドにして、ESDの実践力を形成し持続可能なランドスケープ⁽¹⁾をデザインできる子どもたちの学びの場を保証すること、またそのための教員を養成することを目的としている。

本プロジェクトの背景には、発足の契機となった2つの実績がある。1つは、この佐保川プロジェクトを継続してきた奈良教育大学附属中学校の課外活動である「裏山クラブ」の取り組みである⁽²⁾。もうひとつは、奈良教育大学でのユネスコクラブを中心とした、取り組みである。具体的には、十津川村で2011(平成23)年9月に発生した紀

伊半島大水害の復興を十津川村から依頼されたのをきっかけに世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の古道の修復(「道普請」と呼ぶ)に8回取り組んできた実績である。また、陸前高田市では東日本大震災の復興支援にも2012(平成24)年以降6回取り組んできた経緯があったからである。

本プロジェクト(ここではランドスケープ創出の取り組み)は、それらのお互いの実績につながりあうことを通して、平城山丘陵地における「地域遺産」としての佐保・佐紀路を含む里山の景観回復を目指した。また景観回復がそ

れだけに留まらず、台風やゲリラ豪雨などからの「防災」対策など、地球温暖化による昨今の気候変動からくる災害への備えにも対処できることも考え合わせるよう計画をたてることにした。

附属中学校周辺は、里山の景観を周囲に残しつつも、その里山が開発されて生まれた住宅地である。新規の住民の流入もあるが、60年代の宅地化によって高齢化していく地域社会の課題もある。確かに、平城山丘陵地の里山は、高度成長期以降、その機能が顧みられることが無く開発にさらされ、また放置されてもきた。昨今のナラ枯れ被害と放置竹林の拡大は深刻である。

単なる里山保全の取り組みではなく、里山と地域住民（附中生を含む）との新たな関係性の回復を、ESDの価値観からデザインする試みである。そこには、従来の裏山クラブだけの取り組みに留まらず、「地域自治会と学校」「大学と附属」、そして専門知識と蓄積された経験を持つNPOとの協働を目指している。私たちがこのプロジェクトを「ランドスケープ学習」と位置づけるのは、今日の前にある景観をかつての里山の姿に回復させることに留まらず、持続可能な協働の価値に重きを置いた景観創造を目指しているからである。

なお、本プロジェクトでは、昨年度（2017年）「奈良県くらし創造部景観・環境局景観・自然環境課」からの提案を受け、附属中学校周辺の県有地の管理保全を依頼されたことに端を発している。地域自治会との協力依頼、NPOとの協働の機会は、保全課が仲介の労を取り持っていた（3）。

また、大学との協働においては、奈良教育大学ユネスコクラブ、社会科教育講座（地理学）河本ゼミの協力を得た。

総合的な学習の時間（本校では「特活・総合」と呼ぶ）を活用した第2学年の「奈良めぐり」を、本プロジェクトの延長としてランドスケープ学習ならびにキャリア教育として位置づけることで、「春日山原始林を未来へつなぐ会」事務局の協力を得ることが出来た。

2. ランドスケープ学習へのESD的接近の意味

現在、奈良市北部の県有地の里山では民有地の竹林が放置され、その植生範囲が県有地や附属中学校敷地にまで広がり、いまでは平城山丘陵の山頂部に達するまでになっている。そのため従来の里山の木々は、モウソウチクの地下茎によって根が縛られ、あるいは樹冠が覆われてしまい枯死した様相を見せている。また、竹林内への粗大ゴミの放置による生態系の劣化等、平城丘陵独特の自然景観や地域の生活空間が荒れ始めている。それは、放置竹林だけにとどまらず、昭和30年以降の化石燃料への転換も大きく影響している。生活用に薪を必要としない暮らしが一般化し、里山への手入れがなされなくなった。そのため、燃料としてのコナラが萌芽更新されることなく放置されることになった。2016年度から本校裏山でも広がり始めた「ナラ

枯れ」現象は、年輪を数えると60年前後のコナラが中心に被害に遭っていた。

まず私たちは、このプロジェクトを始めるに当たって、ウェブ上で公開されている空中写真（「地理院地図」等）で、第2次世界大戦後の平城山丘陵地の里山の変遷を辿る学習会から始めた。戦前に関しては写真が無く、古地図で確認することにした（4）。

10年単位で検索してみればその変遷は一目瞭然で、現在は木々で覆われている里山が、第2次大戦後は食料不足もあって頭頂部を除いて畑に開墾されている【図1】。予想もしなかった本校裏山の里山の姿に、子ども達は驚きを隠せないでいた。

その後、コナラが植えられるが、間もなく放棄され、やがて1961（昭和36）年には奈良ドリームランドが開園し、それ以降は宅地造成が始まっていく【図2】。ディズニールンドと類似したエリア構成（「未来の国」「幻想の国」「冒険の国」「過去の国」「メインストリート」の5つのエリア）でスタートした黒髪山に出現したドリームランドも、2006（平成18）年に閉園し、廃墟となっていたが、2016（平成28）年より解体工事が始まり今日の平城山丘陵の景観に至っている【図3】。

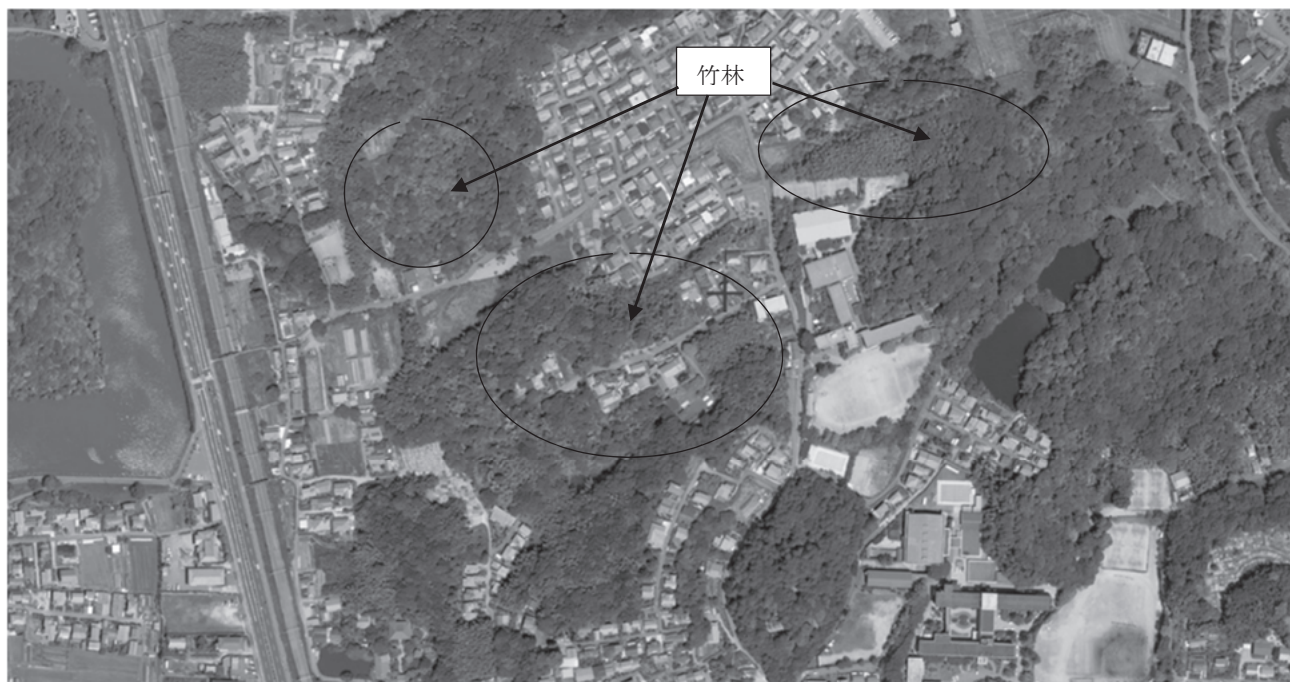
わずか70年ほどの年月の中で平城山丘陵の里山の景観は人間の都合でめまぐるしく変遷していく。このドリームランドの解体工事による、本プロジェクト対象地（奈良教育大学附属中学校周辺の県有地の里山）への影響は少なからず小動物たちの生態に現れているように思えるが、ここでは言及せず次年度以降の調査課題としたい。

ところで、今年度（2017年4月）から、奈良教育大学附属中学校は奈良県景観保全課から県有地（里山）の放置竹林の間伐と景観保全活動を委託され、地域住民と県内で活動するNPO法人と協力して取り組み始めることになった。

しかし、目の前の平城山の景観の背景にある歴史的・生態学的な価値や意味（これを桑子（1999）は「空間の履歴」と呼ぶ）を読み解き、景観の保全活動に留まらず、ESDの文脈で景観を創造的に読み解きデザインするレベルに達するには、子どもたちだけでは困難であることが予想された。そこで、上記にもふれた地域支援の実績を蓄積している奈良教育大学ユネスコクラブ、地理学専攻の河本ゼミの学生と連携する運びとなった。

ここで、本稿で取り上げているランドスケープについて少し解説をしておく。ランドスケープは大きく2つのタイプに分けられる。「風景遺産」と「造園遺産」である。

- 風景遺産
 - ・生活や生業などの営為によって形成されたランドスケープ
 - ・時代の精神や文化的範囲の中で捉えられるランドスケープ
- 造園遺産
 - ・造園技術を用いてデザインされたランドスケープ



【図3 2014年 放置された里山の中に竹林（灰色部分）が広がり出してきた ドリームランドの閉園】
国土地理院ウェブサイトの空中写真に加筆

本プロジェクトは、「地理院地図」から、かつての里山の景観の再生を試みるという意味では「風景遺産」としてのランドスケープに意味づけられると言える。しかし、宅地開発された今日の平城山丘陵の姿から、かつての里山の景観を回復することは、地域との合意形成のプロセスも含めて難しく、中学校の取り組みの枠組みを超えていると判断した。

そこで、私たちは第2次世界大戦後の空中写真と古地図から、かつての里道を割り出し、そこに「空間の履歴」を読み解くことによって、佐保・佐紀を横断する「新『古道』」をこの景観にデザインすることを企画した【図4】。モウソウチクを伐採した跡には、かつての畑が現れた【図5】。そのため、里道の横に出現した畑の活用法も含めたデザインが求められてくることにもなった。私たちの取り組みは、新しく景観に意味付与していくということから「造園遺産」としても意味づけられてくる。

また、本プロジェクトをランドスケープ学習と位置づける場合、「何が里山の衰退をもたらしたのか、なぜ里山から人が去り田畑や森林が放棄されるようになったのか、といった社会的問題に迫ること」（結城・黒田 2017）にも留意して、子どもたちが学習会の場で考える機会を設けた。

ESDは「持続可能な開発のための教育」と訳されるが、ランドスケープ学習には、保全・保護による景観の「持続可能性」(sustainability)に留まらず、景観に「空間の履歴」を読み込むことによって、私たちの生活空間を創造的にデザインしていける「開発」(development)を内包していると考えられる。私たちが、ランドスケープ学習をESDに位置づける意味がそこにある。この考え方の拡張が、後に

記す「特活・総合」で取り組まれてきた世界遺産学習「奈良めぐり」に内容面での深化と発展をもたらすことになった。

折しも平成29年度に出された中学校学習指導要領では、子どもたちが教科で培った「見方・考え方」からこの社会に「何ができるのか?」、持続可能な社会の実現に向けて「子どもたちに『価値の葛藤と選択』場面を用意する」(安彦 2014)ことが求められている。対話を基調として合意形成を目指す価値創造型の協働によるランドスケープ再生の取り組みは、ESDの課題として取り組まれる意味は大きいと考える。

また同時に、あらゆるいのちあるものの「生存権」(安里 1981)の問題として本プロジェクトを捉えておきたい。なぜなら、私たちが景観の中で生き(暮らし)てそこに存在するのは、いのちあるものの「生存権」が保障されていることが大前提となるからである。そして、私たちの生存の様式(自然環境との交渉)が、景観を構成しているからである。

私たちは時代と共にあるだけでなく、常に自然と共にあり、あらゆるいのちとつながっていることに気づき行動できるところにESDとしてランドスケープ学習が位置づけていく意味があると考えられる。

3. ランドスケープ創出の取り組みは私たちに何を教え形成するのか

ランドスケープ創出の取り組みは、私たちにESDの価値はどこに実現されるのか、すなわち持続可能な「地域」



【図4 里道の復元に沿って皆伐を行う】

を捉える開発のための視点を教えてくれる。それでは、このランドスケープ学習を自分たちの生きた知恵にするためには何が必要なのだろうか。学んだ知識は実地に実践されてはじめて生きた知恵になるとすれば、そのために、具体的な「場」と「方法」が必要となる。ここでの「場」とは、私たちが生活を営んでいる「地域」であり、平城山丘陵である。また、「方法」として「地元学」を参照した⁽⁵⁾。

それでは、ランドスケープの具体化の方法として位置づける「地元学」はなぜ生まれてきたかを問うてみる。

⑦分析された「地域」をいくら総合しても、それは現実に存在し、その中で民衆が喜び、苦悩している地域にはならない。地域の実体を全体として統一的にとらえるということは、決して診断、分析、総合、処方というような単層のものでない。

⑧地域を空間的にのみ理解するのではなく、時間的、歴史的に理解することが必要なのではないか。

⑨地域の中の私という主体の形成には、その地域に何をなしうるのか、何をなしえたのか、という省察的問いかけを必要とする。いのちとの対話的關係性を深めていく協働の中で主体は確立されていくのではないか。

上記の問いにもみられるように、地元学は水俣病事件の反省から生まれた地域のもやい直し（対話を通じた関係性の編み直し）の実践である。それは、地域文化の視点と地域を一つの生命体としてみる視点を内在させて、地域の文脈を読み解き物語り直す実践として生まれてきた経緯がある。

また、地元学では、学校現場での ESD との違いで言えば、あまり学校での学習場では取り扱われることのない政治的なガバナンスや地域経済という、生活の具体性を持ったテーマに切り込んでいく特性がある。そのために、地元学にはキーパーソンの存在やインタープリター（案内人）の育成が欠かせない。人づくり、仕事づくりが地域づくりにつながっていくとすれば、地元学を実践することは子どもたちにとってのキャリア教育としても位置付けられてくる。持続可能な開発を担う主体の育成は、学生や子どもたちにとって、地域への深い理解といのちへのケアが実践



【図5 竹林を伐採すると 70 年前の畑が現れた】

できるとともに、わくわくする喜びを場に「かたち」として実現し、未来に積み上げていけるものでありたいと考える。

なお、本プロジェクトに参画した学生にとっての経験は、地域貢献やキャリア形成まで見通したこれからの「総合的な学習の時間」「特別活動」など、具体的な実践を通した次世代教員の力量形成として確立され、寄与するものと考えられる。

4. 平城山ランドスケープ創出の実際

それでは平城山のランドスケープ再生活動は、この風景のどの年代の再生を照準とすればいいのだろうか。私たちに「奈良県くらし創造部景観・環境局景観・自然環境課」から要請された管理・保全活動は、里山（県有林）に侵入した放置竹林の皆伐と本来的植生の再生と里山のデザインである。附属中学校北側の管理地は裏山の山頂にまで竹林が侵入していて、かろうじて残っていた 70 年生のコナラはほぼナラ枯れで枯死してしまい、竹林床には低木層は育っていない状態であった【図6】。

取り組みを開始するにあたり、河本が平城山丘陵の景観が戦後 70 年間でどれほど変遷を遂げてきたのかを、「国土地理院」の空中写真を使って講義を行った。戦後すぐの写真から、山頂の古墳以外における木は皆伐されていて、畑と茶業試験場の茶畑が広がっているのが読み取れた。今では想像できないが、万葉集にも詠まれているように佐保川流域にあるこの丘陵地は霧が発生し茶栽培に適した景観であったことも読み取れる。今でも、附属中学への通学路に散見する野生化した茶の木はその当時の「生き証人」でもある。また、それ以前の古地図からは、この写真に見えるウワナベ・コナベ古墳に抜ける里道がこの佐保・佐紀を横断する古道であることが確認された。

そこで、まず私たちは附属中学校東側に見える 2 つのため池から、現在の北グラウンドにつながっている里道を「新『古道』」（「気づきと散策の道」）として復活することを企画した。この里道の再生の意義について、河本・中澤



【図6 ナラ枯れ木の切り株の年代測定】

からは1960年以降造成された溜池下の住宅地の広がり、今日の県内のゲリラ豪雨被害の状況を考え合わせると、災害避難路としての役割を佐保山自治会と協議して地域の協力も得ながら、学生、中学生と「新『古道』」に取り組むことがESDの防災教育になると提案がなされた。

この企画では、皆伐後の植樹を施すことによって地盤の安定性を取り戻し、災害非常時用の避難路の確保と共に、裏山北側にゾーニングされた竹を活用したスタードーム（シェルター）や簡易な設備（トイレの設置）が誰もが協同して短時間で作れることを目指している。

2017年11月現在、図5の状態である。裏山北側の鞍部の竹林が切り倒されて分かったことは、このため池に抜けていく里道が風の通り道であったことだ。かつての景観が顕れてくるに伴い、暗い空気の滞った竹林が、風通しの良い里山に変貌し、東側に春日山、西側に生駒山の容貌を丘陵陵ぎに出現したのである。

本節の最後に、課外活動として本プロジェクトに取り組んだ「裏山クラブ」のこの1年の流れをまとめておく。

【開始前】

3月 奈良県景観保全課が、奈良教育大学附属中学校周辺の里山を調査。地域自治会への了解と協力を取り付ける。その後、県から正式に管理委託を受ける。

4月 協力していただくNPO法人が紹介される。

5月 NPO法人の平城山での活動を見学する。

【開始】

6月 チェンソー講習会 間伐講習会（7h×2日）

7月 平城山の変遷についての学習会（2h）

平城山踏査 里道の確認（3h）

8月～11月 附属中学校裏山北側県有林のモウソウチクの皆伐作業（主に平日の放課後の部活動で取り組む）
県農林課から竹チップ用機械の貸し出し（2週間）

12月 河本ゼミ学生（3名）ならびに奈良教育大学への留学生（3名）が参加

【参加者】

裏山クラブ 67名（1年～3年）

平均して 各回男女合計30名弱附属中学校教員 3名



【図7 チェンソーメンテナンスの説明を受ける】



【図8 大学生・留学生も間伐作業に参加】

地域住民の方 5名

大学関係 教員 2名 学生 6名

NPO関係 2団体

【作業に使った道具】

電気チェンソー 2台（竹伐り用・木材用の2種）

エンジンチェンソー 2台（竹伐り用・木材用の2種）

竹伐り用のこぎり 20本

エンジン付き刈り払い機 2台

軍手 50人分（全員分配布）

鉋 6本（間伐した竹の枝打ち用）

鎌 8本（下草刈り用）

ロープ 20m×6mm 4本 遊歩道柵作り用

竹割り 1台

ヘルメット 20個

【道具の購入について】

道具購入には、学長裁量経費、次世代教員養成センタープロジェクト、都市緑化機構からの助成が充てられている。

【間伐された竹の処分について】

大量の間伐された竹が出てくるために、基本的に4つの処分方法を考えた。

① スタードームやツリーハウスづくりの用材、花瓶や食器などのアメニティとしての活用

- ② 里道の垣根としての活用
- ③ チップとしての処分
- ④ 数カ所に分散させての集積し、腐らせる方法。

【注意・配慮事項】

間伐作業は危険が伴うと共に、道具を扱う技術が必要となる。そのため、学年・男女関係なく全員がチェーンソー講習、間伐講習、ロープワーク講習を受けることを義務づけている【図7】。

各講習会については、講師（幸田高由氏；三重秘密基地研究会代表）を年間5回招聘して学んでいる。なお、作業時は、晴天の日に行われているために熱中症に留意し、各自の体調に応じて休憩を取らせた。また、連続2時間以上の作業は行わないことにした。

また、どうしても間伐作業では怪我がつきものであり、保健室から応急処置用の救急セットを貸し出してもらう。また、ケガ対応として、保健室との連携をとっている。スズメバチ、毛虫、ブヨ、藪蚊などの昆虫類には随分悩まされた。他に、マムシ、ウルシ、ニセアカシアへの注意喚起も行った。

【その後の管理】

基本的には次の方法をとっている。

- ① 普段の見回りによって、間伐地の芽生えの状況を確認。
- ② タケノコの採取。または、背丈2～3m段階での間伐（腐りやすさと伐りやすさと安全面から）

今後、出現したかつての畑をどのようにしていくのか、里山の何を残し育てていくか保全内容の検討とともに、地域を含めた創出のデザインや管理運営の協議もしていく予定である。

5. おわりに

本取り組みを拡張して、本年度は総合的な学習の時間と特別活動に位置づけられた「奈良めぐり」「臨海実習」（共に第2学年）でもランドスケープ学習を組み込んで取り組み始めている。本稿の最後に、第2学年秋の「奈良めぐり」、春日山原始林コースの学習についてふれておく。



【図9 若草山野上神社前でのインタープリター実習】

■要項より

1. ねらい

○身近な世界遺産（古都奈良の文化財；奈良市にある寺院などから構成される文化遺産）を、インタープリターと共に探索し、とりわけこのコースでは春日山原始林の歴史的価値を学ぶ。

○古都奈良の文化財と共にある春日山原始林のランドスケープの形成を、その「空間の履歴」から読み取る方法を体験的に学ぶ。（地域の宝、「光」を観る、観せる）

○「そこで何を見せたいのか？」「そこで何に気づかせたいか？」、自分たちがインタープリターとしてポイントガイドができるようになる。（インタープリター、地元学の方法論を体験的に学び、将来の地域でのESD実践に資する。）

○3年生での沖縄修学旅行タクシープランにつながるよう、「価値ある問いの立て方」を身に着ける。「森の見方」というのは、どのようなことをねらっているのでしょうか。

2. 日時 平成29（2017）年12月8日（金）

3. インタープリター

杉山拓次さん（春日山原始林を未来へつなぐ会）

本庄眞さん（関西環境教育学会会長）

4. 生徒人数 40名

5. コース 春日山遊歩道入口（北）スタート→若草山山頂(342m)→春日大社ゴール

6. 生徒によるインタープリテーション

この間、2回にわたる学習会を持ちました。そのなかで、実行委員のメンバーは各テーマで現地にてガイドをします。簡単な資料（B4で1枚）を当日現地で配布します。

①春日山鹿の生態とランドスケープガイド；春日大社と鹿、鹿害の実態と対策、今後の景観の在り方

②春日山の文化財とランドスケープガイド；春日大社と春日山の信仰施設、旧柳生街道の文化財

③春日山の野鳥と自然のランドスケープガイド；冬鳥の生態、春日山の森の変遷と野鳥の推移

④春日山の水源地の森と生命のランドスケープガイド；春日山の森と川の生態と変遷

総合的な学習の時間での「奈良めぐり」の取り組みは、コース別事前・事後指導（4時間+2時間；計6時間）、4コースの実行委員会をつくり、各コースのインタープリテーションが担えるべく、4時間程度の学習会と下見を実施している。実行委員会はテーマ別で希望者を募った。春日山コースは裏山クラブ員が中心メンバーとして運営を行った。

課外活動と総合的な学習の時間の結びつきは、環境への問題関心を将来の仕事や研究にしたい子ども達にとって、インタープリターからの直接の指導、現地でのインタープリター経験とその評価は、子どもたちのキャリア形成としても意識づけられたことを記しておきたい【図9】。また、このような連続性を貫けたのは、ESDが奈良教育大学附

属中学校の教育課程の背景にあることも付け加えておきたい。

私たちのランドスケープ学習、そしてその創出の取り組みはまだ始まったばかりである。平城山から春日山につながっていくランドスケープが、これからどのように語られ、新たに語りなおされていくのか、今後その ESD からのアプローチ法が問われてくるだろう。

註

- (1) 本稿での「ランドスケープ」について、その枠組み、本プロジェクトでの位置づけを 2 節で述べる。「ランドスケープとしての里山」について、その定義づけの問題点は「里山言説の地勢学」(結城 2017)を参照されたい。
- (2) 以下の論文がある。
 - ・「ESD 佐保川プロジェクト(1)吉村長慶を通して見た現在の佐保川流域における景観構成の試み」, 竹村景生, 谷口義昭, 松川利広ほか 6 名, 奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第 1 号, 2015, 267-272
 - ・「未来に残したい佐保川上流域の景観構成の試み〜ESD 佐保川プロジェクト(2)〜中学 3 年「総合的な学習の時間」・『卒業研究』における取り組みから」, 竹村景生, 松川利広, 谷口義昭, 荘司雅規ほか 4 名, 奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第 2 号, 2016, pp. 217-221
 - ・「ESD 佐保川流域プロジェクト(3) — 佐保川を地域の文化・環境でつなぐ流域思考的な学びの総合“寧楽遊学”の構想 —」, 竹村景生, 松川利広, 谷口義昭, 荘司雅規他 4 名, 奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第 3 号, 2017, pp. 139-144
- (3) 協力団体; なら橘プロジェクト推進協議会, やまと菜の花ねっと, 奈良・人と自然の会, 高畑自然教室, 奈良県薬務課, (株) 前忠, 緑友会, 法蓮奈良山町自治会
- (4) 国土地理院のウェブサイトである「地理院地図

<https://maps.gsi.go.jp/>を参照。画像の保存等は、画面右上の「機能」→「ツール」で可能。オルソ化された写真は地理院地図に数年次分ある。それ以外は「地図・空中写真閲覧サービス」を参照。米軍撮影のものなどは、以下のサイトを参照。

<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>

各画像を表示させた後、左下にある「高解像度表示」を押す。

(5) 地元学は、行き詰まりを見せた村おこし運動に、地域文化の視点と地域を一つの生命体としてみる視点を内在させた、言い換えれば「外部化されてきた自然」を「内部化する」地域の文脈を読み解き物語り直す実践である。また、学校現場での ESD との違いで言えば、あまり取り扱われることのない政治的なガバナンスや地域経済という、生活の具体性を持ったテーマに切り込んでいく特性がある。

引用・参考文献

- 安里清信 (1981), 「海はひとの母である」, 晶文社
桑子敏雄 (1999), 「環境の哲学—日本の思想を現代に活かす—」, 講談社
桑子敏雄 (2016), 「わがまち再生プロジェクト」, 角川書店
桑子敏雄編著 (2017) 「環境と生命の合意形成マネジメント」, 東信堂
養父志乃夫 (2016) 「里山里海」, 勁草書房
野田研一 (2016) 「失われるのは、ぼくらのほうだ」, 水声社
結城正美, 黒田智編 (2017), 「里山という物語」, 勉誠出版
吉本哲郎 (2008) 「地元学をはじめよう」, 岩波ジュニア新書 609, 岩波書店